

吉田松陰と「坤輿図識」



三宅 紹宣^{み やけ しょうのぶ} (広島大学名誉教授)

一九四九年広島県生まれ。著書『幕末・維新时期長州藩の政治構造』(校倉書房)、『幕長戦争』『幕末維新の政治過程』(吉川弘文館) ほか多数。

はじめに

本稿は、吉田松陰と「坤輿図識」^{こんよずしき}のかかわりについて、松陰の書き込み等の学習の痕跡を復元することによって、その海外認識を説明しようとするものである。「坤輿図識」については、萩松陰神社に松陰手沢本が伝存している。そこには、おびただしい書き込みや、校訂の跡、朱点があり、松陰の熱心な研究ぶりがうかがえる。それを丹念にたどることによって、松陰の関心、そこから得たであろう海外認識など多様な情報を汲み上げてみたい。

この作業は、従来の松陰研究を克服していく上でも、重要な意義を有している。それは、これまでの松陰研究は、『吉田松陰全集』⁽¹⁾に依拠して行われてきたが、『全集』には、海外関係史料が収録されておらず、また解説にも触れられていないという問題がある。このため、松陰の海外認識に関する部分を欠落させたまま松陰研究が行われてきており、このことが、松陰の攘夷論は、海外のことを知らない無謀な考えだとするイメージを作る原因

になっている。したがって、『全集』のみに依拠した研究を克服していく必要がある。本稿では、まず松陰と「坤輿図識」のかかわりを分析し、次に「坤輿図識」のアメリカー・イギリス・フランスの部分を翻刻して、そこに松陰がどのような書き込みをしているかを明らかにし、さらに、松陰の海外認識がその思想にどのような影響を与えているのかを具体的に検討したい。

一 吉田松陰と「坤輿図識」のかかわり

吉田松陰は、弘化三年(一八四六)、松陰の養父吉田大助の高弟山田宇右衛門から「坤輿図識」⁽²⁾を贈られた。松陰は、後に「治心気齋尤も海賊を以て深憂とす。余是に於て憤を発し食を忘れ、边防を講究す」と回想し、山田の説に感銘して対外的危機を憂え、防備のことを食を忘れるほど熱心に研究するようになったと述べている。

「坤輿図識」⁽⁴⁾は、洋学者箕作阮甫^{みづくりげんぽ}の養子箕作省吾が、数種の蘭

書を基にして編述した世界地誌で、世界六大州諸国の地誌を体系的に説いたものである。弘化二年（一八四五）、五巻三冊として刊行された。よって、刊行後まもなくして松陰の手に入ったことになる。さらに、補編四巻四冊が、弘化三年から四年にかけて刊行された。補編についても松陰の弘化四年「旧鈔」（読書の随録）に「坤輿図識補四、十一月十六日より同十八日三至り一遍読取」とあるので、刊行後の早い段階で読んでいることがわかる。松陰の「坤輿図識」に関する読書や講読の記録には、次のようなものがあり、生涯にわたって愛読していたことが確認できる。

(一) 松陰は、嘉永四年（一八五二）四月九日に江戸へ遊学した。そして、同年六月五日付萩の杉梅太郎宛書翰に「一、坤輿図識・図共に便り之れあり候節、御送り越し頼み奉り候」（七—五六）と、「坤輿図識」を地図とともに送ってほしいと依頼している。

(二) 嘉永四年七月二十二日以後の杉梅太郎宛書翰に「先達より追々申上げ候内、方正学文粹、文章軌範は強ひて急需にても之れなく候。坤輿図識どもは見度く存じ奉り候」（七—六八）と、「坤輿図識」を早く見たいと希望している。

(三) 安政元年十一月十四日付杉梅太郎書翰で、杉が、野山獄に在る松陰に、「海国図識」^(志)を渴望するなら借用しようかと尋ねたのに対し、松陰は十五日復書で、「どうぞ借覧仕り度く候。借覧相成り候はば輿地全図、坤輿図識を付送願ひ奉り候」（七—

二六一）と、「海国図志」に「輿地全図」「坤輿図識」を付けて送ってほしいと返事している。

(四) 「野山獄読書記」を見ると、安政元年十一月二十二日に「坤輿図識三冊、新製輿地全図壹軸、海国図志」を読了しており（九—四〇五）、まもなく松陰のもとに届いたのであろう。

(五) 安政元年十一月二十七日付杉梅太郎宛書翰で「坤輿図識補一見仕り度く候間、何とか術はあるまいか、たれか所持しらずや」（七—二七二）と、「坤輿図識補」を見たいと希望している。

(六) 安政二年一月十一日頃、杉梅太郎宛書翰に「図識一（中略）受取り申し候」（七—三三五）とあり、松陰のもとに「坤輿図識」が渡ったことがわかる。

(七) 杉梅太郎は、先きに依頼をうけた「坤輿図識補」を探したと見え、安政二年二月七日付書翰で「民七は字を知り心懸け候者にや。此の内図識補を携へ居り候」（七—三五六）と書き送っている。

(八) 安政二年三月二十七日、松陰は、兵学門人の妻木士保に宛て、「扱て又、輿地の学、後進生御誘掖専務と存じ奉り候。坤輿図識一部にても精読すれば其益小ならず」（七—三六一）と書き送り、後進の指導に地理学は重要であり、「坤輿図識」は有益であると述べている。

(九) 安政二年四月上旬、「野山獄読書記」によって「坤輿図識補四」を読んでいることがわかる（九—四一〇）。

山田から贈られた「坤輿図識」は、萩松陰神社に伝存している。なお、「坤輿図識補」は、萩松陰神社には伝存していないが、熱心に学習していることは、以上のような経過から確認できる。次に、「坤輿図識」のアメリカ・イギリス・フランスの部分の本文と松陰の書き込みを翻刻しよう。

二 「坤輿図識」の翻刻と松陰の書き込み

「坤輿図識」で注目されるのは、まず凡例において「各国有独立者、有附属者、其附属者、雖有名大邦、低行首一字、以分於独立国」と、独立国と附属国を厳然と区別し、附属国は、有名な大国であっても、一字下げにして独立国と区別して記載すると述べていることである。この編集方針により、視覚的に明確に判別できる形で附属国が記述されている。

たとえば巻一亜細亜誌の中での一文字下げの附属国は、次のような国である。

朝鮮、満州、蒙古、カルカス、サカレン（カラフト）、ロシア
ア韃靼（シベリア）、カムシヤヅカ、新センブラ、小仏加利、トルコ、カンボチャ、セイロン、マルヂヘス、台湾
これらの国は、主権の存しない附属国として扱われているのである。

これに対し独立国は次のような国である。
日本、漢土、独立韃靼、ツベツト、大仏加利、トルコスタン、

ウスヘンキ、コサツケン、カウカシユス、アラビア、ペルシア、天竺（その中にベンガラ、ホンバイ、ゴア、マラバルの附属国あり）、後インド、アセム、ビルマン、シャムロ、マラッカ、コウチ、トンキン、シユモダラ、ジャワ、ボルネヲ、セレベス、ミンダノ、ルスン

これらの記述から松陰は、世界に独立国と附属国が厳然と存在するというリアルな現実を学んだと推察される。

（一）アメリカ合衆国の翻刻（「坤輿図識」巻四下、萩松陰神社蔵）
割注は（〜）、松陰の朱点および本文行間への書き込みは（ ）で示す。また、松陰の欄外書き込みについては、（A）から（J）の記号を付して示し、その部分は判別しやすくするため、原本を改行する。なお、松陰の書き込みには、句点はないが、適宜、三宅が付した。

フルエーニフデスターテン
共和政治州総説

此疆域、北ハ（ ）新貌利太泥亜ニ接シ、南ハ（ ）墨是メキシコ可ニ至リ、其東西ハ大洋ニ臨ム、域中本トハ八国ナリシニ、次デ十三州トナル、近世又倍々加リテ、三十余州ニ至ル、然レドモ、国主酋長有ルニ非ズ、毎國、其賢者数人ヲ推テ政官トナス、土人数種ニシテ、各地其俗ヲ同セズト雖ドモ、亦彼此貴賤ノ別ヲ設クルコトナシ、其地ノ南部ハ、稼穡ヲ業トシ、北部ハ諸種ノ器什ヲ造リ、

亦或ハ四方ニ貿易スル者アリ、其至ル地ハ、欧邏巴諸州、東西印度諸島、及ビ支那国、其最タリト云、闔州人口、一千四百二十四万、（此数、我天保六年、西洋人記載スル所、）

（A）（康熙二十八年初有十二万丁、乾隆五十九年不過三百九十二万一千三百二十五口、道光十年一千二百八十六万六千九百二十丁〔図志〕、当我天保元年、按三十七年之間、増八百九十四万五千五百九十五口）

軍人八十萬戰艦大小八十一、其制度刑政、及ビ国ノ大事ハ、各国共和シテ、其時宜ニ従フ、其風俗各地同ジカラズト雖ドモ、要スルニ、粗々西洋諸州ニ髣髴タリ、惟天度ハ、欧邏巴諸州ニ同ジト雖ドモ、其土地山川ノ形勢ニ因リテ、氣候之ニ比スレバ、較々寒冽ナリ、此域本ト、亜墨利加洲中ノ一部ト雖ドモ、其地洪大ニシテ、人民過多、其勢モ亦最モ旺盛ナルヲ以テ、今或ハ単ニ、此地ヲ通称シテ、北亜墨利加洲ト云、按ズルニ、此域其初メハ、茫茫タル曠野ノミニシテ、是名称有二非ズ、我万治六年ノ比ニ当テ、英吉利国人、始メニ此地ノ南辺「(、)カロリナ国二人種ヲ移ス、尋テ又享保十九年、此部中「ネウヨルク」及ビ「コンネクチキユット」ノ地ニ数百ノ人種ヲ移スト云フ、然レドモ、当時ハ尚寂寞タル寒郷ニシテ、一モ記載スヘキ者ナシ、後数年、英吉利国ノ人民、間々其固有定法ノ教化ニ、従ハサル者有リ、

（B）（泰昌年間、英吉利王嚴諭庶民、奉上帝者、尽一同帰波羅土特教、不得任意奉額利教、加特力教、違者加刑、由是、国人

願從居新国者、二三百人、益奉加特力教、欲随意事上帝也〔図志〕、泰昌元年我元和六年也）

是ニ於テ其種ノ人民数万ヲ捕ヘテ、遠ク此地ニ遷ス、其人民等、当時飲食衣服ノ用ニ欠クト雖ドモ、又窃ニ此地ニ国主酋長ナキヲ喜ビ、其衆人ト謀リ、大ニ山川ヲ疏鑿シ、土地ヲ開墾シテ、農耘稼穡ヲ業トシ、又旁ラ漁獵ヲ事トス、後若干年ニシテ、其子孫蕃衍シ、三十有余万ニ及ビ、物産又極メテ夥シ、遂ニハ英人、此地ニ来リテ、交易ヲ為スニ至ル、我宝曆中（乾隆間〔図志〕、英二数年ノ戦争有リテ、其人民大ニ凋喪シ、四方ノ貿易、欠ク処少ナカラス、是ニ於テ英人此地ノ人民ヲ雇テ、自己ノ用ニ充ントス、邦人其言ノ猖狂ナルト、俸錢ノ薄キトヲ惡ミテ、其命令ニ服從セズ、却テ英人ノ印度諸邦ヨリ、輸送スル所ノ茶葉、三百四十二箱ヲ取テ水中ニ投ス、是ニ於テ、英人憤懣ニ堪ヘズ、兵艦数艘ヲ發シテ此地ノ第一馬頭^{ミナト}ヲ圍ミ、先ヅ其糧道ヲ絶ツ、土人亦頗ル窮シ、其共和十三州ノ政官ヲ会シテ、事ノ成敗ヲ議ス、忽チ軍官名ハ「(△)ワスヒンクトン」、

（C）（立華盛頓為師、於乾隆四十一年四月初四日、衆告各国曰云々〔図志〕）

（D）（共和三十一州ノ総府ヲ^{ワシントン}話盛東ト云、人名又ワスヒンクトン」ト云、取テ府名トナス〔補〕）

（E）（話盛東小伝〔同〕、寛政十二年彼十二月十四日卒、齡六十七、嘉慶五年華盛頓卒〔図志〕）

文官名ハ、「フランクリン」席ヲ進テ、颺言シテ曰、天時ハ失フ可カラズ、宜ク長ク英人ト交ヲ絶ツベシ、衆其議ニ一決ス、英人モ亦事ノ成ル可カラザルト、己レカ言ノ理ナラザルトヲ知テ、其困ミヲ解キ去ル、尋イデ我安永九年、(我寛政三年ノ頃、英ノ所屬ヲ離レ、独立トナル、補 此地ノ政官、某ナルモノ、英吉利国人ト会シテ長ク不羈独立ノ国タルコトヲ約ス、

(F) (千七百七十五年(安永四未、五申)ノ頃、北亜墨利加ノ国民、伊祇利須ニ叛キ、兵ヲ興シ、戦争ニ及フ、千七百八十年、八十一年ノ頃(安永九子、天明元丑)マテ連綿シテ伊祇利須人ヲ追討シ、終ニ自立ノ土地トハナレリ、夷酋問答)

(G) 乾隆五十三年推華盛頓為首(図志)、華盛頓在位二次、始末八年、伝阿丹士、嘉慶六年間、阿丹士在位四年、伝遮費遜、、、在位八年、伝馬底遜、、、在位八年、伝滿羅、、、在位八年、伝阿丹士之子、、、在位四年、伝查其遜、道光十七年、在位八年、伝泛標倫

爾来国勢倍々加ハリ、其近隣、徒党ヲ聚会シテ、此盟社ニ来会スル者、勝テ算フベカラズ、近二十年ニ至リテハ、各国学校ヲ設ケ、日々ニ経済ノ学ヲ講ズ、就レ中「ネウヨロク」、「マスサクセツツ」国ノ如キハ、巧麗ノ觀象台、羅甸学、及ビ数万種ノ本草園ヲ設ケテ、生徒ニ教諭スト云フ、其南部ハ、氣候不和ニシテ、土人往々、黄熱病ニ係リテ、死スル者アリト云フ、部中「ケンチュケ」国ニ、一奇事アリ、嘗テ硝石坑

ヲ掘リシニ、中ニ石人数員ノ存在スルヲ見ルト云、(寛惠按スルニ、外紀所謂那多里石人ノ類カ)土産、五穀、苧麻、烟草、茜根、吐根、砂糖、藍、綿、吉貝、菓物、蜜、蠟、鐵、鉛、銅、些小金銀、上好牛馬、皮革、海狸、鼈、諸種上好器什等、

(一)「ロウイシアナ」(累斯案(図志))、本ト伊斯把泥亞ニ屬ス、後仏蘭西ニ併セラル、我文化元年、仏人千五百万金ノ為メニ、此地ヲ割テ、長ク共和政治州ニ鬻キ与フ、

(H) (嘉慶十九年増累斯安部(図志) 按当我文化十一年) 其疆界、北ハ未審ノ曠野ニ至リ、南西ハ(一)両墨是可ニ接ス、部中大河アリ、「ミツシスシツピ」(美斯細比大河(図志))ト云、夥シク鱗介ノ族ヲ産ス、其首府ヲ(一)「ラルレア、ンス」ト云、人口三万九千二百余、我文化中、此州ヲ分テ、三大部トナス、每部人口三万二千余、中二十二酋長アリテ其訴訟ヲ聽ク、土地ハ膏腴ニシテ、上好ノ五穀ヲ産スルコト、北亜墨利加地方、之ニ比較スベキ者ナシ、産物、金、銀、酒、材木、鼈其種類数品アリ、皆啖フベシ

(一)花地、往古ハ東西二部ニ分ツ、其首府ヲ「アウギスゲン」ト云、人口二千余、昔時ハ此地ノ人、盜賊有ルコトヲ知ラズ、故ニ他邦ノ人此地ニ来リ住ス者、他ノ物貨ヲ窃ミ、公然トシテ慚心ナカリシト云フ、今ハ漸ク西洋人種蕃衍シテ、其風俗アルコトナシ、其東部ハ、山岳曠原、或ハ大沙漠ノミニシテ、五穀ヲ産スルコト至テ寡シ、西部ハ之ト同ジカラズ、百年前、英吉

利人此地ノ西部ヲ奪掠シテ、其地ヲ併有ス、後三十年ニシテ、伊斯把泥亜ニ復スト云フ、我文政三年ノ会盟ヨリ、此地ノ「バルチト川迤西ヲ割テ、長ク共和政治州ニ附属タラシムルコトヲ約ス、産物、米穀、酒、吉貝、木綿、美麗蛇、

其共和政治州ト称スル者三十一国、

- 一「マスキュセツツ」 二「(○)マイネ」(○地字正宗ニ見ユ)
 三「(○)フルモント」 四「ニイウハムプシール」 五「(○)コンネクチクユツト」 六「ロデスエイランド」 七「(○)(新)ニイウエルセ(レ)イ」 八「(○)(、)ニイウオルク」(人口十三万(補)) 九「(○)(、)ペンセールファニー」 十「(○)ケンテュツケイ(ツト)」 十一「インヂアナ」(引底亜(図志)) 十二「(○)マレイランド」 十三「(○)(、)ヒルギニイ」 十四「(○)ワイヨ」 十五「(○)テンネスセーランド」 十六「(○)(、)ノールドカロリナ」 十七「(○)(、)ソイドカロリナ」(南北駕羅連(図志)) 十八「(、)ゲラルギイ」 十九「(○)デラワアレ」 二十「(、)ミسسシスシツピ」(美士細比(図志)) 二十一「(、)ラルレアンス」 二十二「イルリノイス」 二十三「(、)ロイシアナ」(前ニミュ) 二十四「(、)ミシガウ」 二十五「ノールドウェストゲビイド」 二十六「コリンビア」 二十七「(、)フロリダ」(前ニミュ) 二十八「アルバマ」 二十九「アルカンサス」 三十「ヲネガン」 三十一「(、)ミスソウリ」(美蘇里)

以上の松陰の書き込みについて判明することは、以下のようにある。

(A) 松陰は「海国図志」に記載されている人口を書いて、情報を補足していることにより、アメリカが急速に発展している様子に関心を持っていることがわかる。また、人口増加数の計算も細かく行っている。算術を大事にすることを門人達に奨励した松陰の面目躍如たるものがある。

(B) 泰昌元年(一六二〇)、イギリス国王が庶民に命じ、一同を波羅士特(プロテスタント)教に帰し、額利(キリスト)教、加特力(カトリック)教を信仰することを禁止し、違反者に刑を加えようとした。これにより、新国に居住することを願う者、二三百人は、加特力教を奉じ、上帝(万物の造物主)に従おうとした。いわゆる、一六二〇年、清教徒がアメリカ大陸に移住した事件について、「海国図志」から引用して記したものである。松陰が、「海国図志」に通じていたことがわかる。また、この年が、日本暦で元和元年に相当することを正確に換算している。

(C)・(F)の書き込みによって、松陰がアメリカ独立戦争に関し、イギリスを討して独立を達成したことに関心を寄せていることがわかる。

(D) アメリカの首府ワシントンは、人名ワシントンに由来していることを記している。

(E) ワシントンの没年は西暦一七九九年十二月十四日なので、和暦では寛政十一年となる。なお、「坤輿図識補」に「話聖東小伝」があり、その生涯が詳述されている。⁽⁸⁾

(G) これは、アメリカ大統領一代ジョージ・ワシントン、二代ジョン・アダムス、三代トマス・ジェファソン、四代ジェームズ・マディソン、五代ジェームズ・モンロー、六代ジョン・クインシー・アダムズ、七代アンドリュー・ジャクソン、八代マーティン・バン・ビューレンが、在位八年ないし四年で次の大統領に地位を伝えたことを記したものであり、松陰がアメリカ大統領に関心を寄せていたことがうかがえる。

(H) 嘉慶十九年(一八一四)にアメリカはルイジアナを加えたことを「海国図志」によって書いている。その年は、日本では文化十一年に相当すると考証している。実際にルイジアナ州が成立したのは一八一二年である。

また、「坤輿図識」のアメリカ独立戦争の経過についての記述全体を要約しておく次のようである。

(一) 一七五五年から六三年のイギリスとフランスの抗争(フレンチ・インディアン戦争)と、そのことによって貿易が衰退したこと。

(二) イギリスのアメリカ植民地への圧政とそれに対するアメリカ人民の不服従。

(三) 一七七三年、イギリス船上の茶葉を海中に投げ捨てるとい

うボストン茶会事件が起こり、イギリスが軍隊を差し向け、ボストン港を封鎖し弾圧したこと。

(四) 一七七四年、植民地代表が会してフィラデルフィアに大陸会議を開き、反英抗争を展開すること決議したこと。一七七五年、ジョージ・ワシントンを植民地軍の総司令官に任命し、大陸軍を編制したこと。

(五) 独立戦争の結果、イギリス軍が敗退し、イギリス政府も講和を求め、一八八三年パリで講和条約が調印され、イギリスはアメリカの独立を承認したこと。

以上の歴史経過が、年代等の誤記があるもののほぼ正確に記述されている。また、アメリカが独立したことを「不羈独立」と表現していることも注目される。この用語は、松陰が、「独立不羈三千年来の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや」⁽⁹⁾などと、語順は異なるものの多用したものであり、「坤輿図識」にも散見されるので、その影響によるものとも推察される。

(二) イギリスの翻刻(「坤輿図識」巻二、萩松陰神社蔵)

(一) 大貌利太泥亜、是和蘭、仏蘭西ノ西海ニ在ル所ノ、二大島ノ総称ナリ、其西ナル者

(I) (我宝永五年、思哥齊亜ヲ合ス、享和二年ノ頃、意而蘭土ヲ合ス(補))

ヲ、(、) イルランド 意而蘭土ト云、昔時自立王アリ、今ハ英吉利島ニ属ス、一ヲ英吉利ト云、其一部北地ヲ(、) スコシヤ 思哥齊亜ト云、其惣王、英吉利ニ都スルヲ以テ、亦大英吉利国トモ云、今分ツテ五十二州トス、中ニ六十二侯アリテ、皆国王ニ臣服ス、其都府ヲ(、) ロンドン 竜動(邦人ハ「シテイ府ト云(補)ト云、人口二百零五万、四達喧闐ニシテ、数所ノ互市場亦極メテ繁盛、西洋諸州、此地ニ比スル者ナシ、其府、人煙櫛比ナルヲ以テ、家々ノ井泉、給セサル処多シ、故ニ近世遠山ヨリ、水桶ヲ接シテ、水ヲ引ク、其路程殆ンド三十里、毎戸水槽ヲ置テ之ヲ受ク、亦人力ヲ煩ハサズ、府中大河アリ、テムス 爹摸斯ト名ヅク、奇巧ノ橋ヲ架ス、其長サ百八十丈、幅四丈余、夜ニ至レバ、其橋上数基ノ灯火ヲ点ジテ、往来ニ便ス、其河畔、炮台数所アリ、寇アルトキハ之ヲ發ス、其矢丸直チニ水面ヲ注射ス可シ、又大学校アリ、生徒常ニ数万ニ減ゼズ、其聖宝斯シントバタスノ廟ト称スル者、高五十八丈余、其周圍四十丈、造築巧妙、聖伯多祿廟(意太里亜条ニ見ユ)、ニ譲ラズ、其地ノ近郊ニ国王ノ遊園アリ、四方五里ニ余マル、春時ニ至レバ、侯伯貴族多ク此ニ遊觀ス、時トシテハ、乗車四五百輛ノ、往還スルヲ見ルト云フ、其二島ヲ合セテ、広袤、独逸国里法ニテ計ルニ、五千七百箇、民口一千八百万零四千余、土人常ニ好デ四方ニ貿易ス、其船大約二万八千零八十一、其船上ニ役使スル卒、一十八万四千名、其属国領地、五大洲中ニ延亘ス、其所属数国ノ地ヲ合シ、長ヲ絶テ短ヲ補ナヘバ、広袤独逸里法ニテ、十万一千箇里方タリ、国王所持スル所ノ

軍艦最モ夥シ、其数大煩四十門ヨリ、百二十門ヲ備フル者、八百四十六(百年前記スル所、惟九十一艘)アリ、故ヲ以テ海上ノ戰鬪ニ於テ、西洋諸州之ニ抗衡スル者甚タ寡シ、和蘭国軍艦ノ如キ、洋中ニ於テ遇フトキハ、遙ニ其旗章ヲ伏テ過クト云ヘリ、徽章赤白青ノ三アリ、就レ中テ最モ赤ヲ重トス、其軍卒八十八歳ヨリ、四十五歳ニ至ル者ヲ以テ規トス、騎兵一百九十九隊、歩兵二百五十二隊、其他印度所領ニ畜フル所ノ軍艦、亦一百二十四艘、軍卒六十一レヂメント(「レヂメント」ハ、則チ八百六十四名ヲ云フト云ヘリ)、(五万二千七百四名ナリ)(J) 其他騎兵及ビ西洋祖国ノ白哲人、常ニ此地ニ在ル者、三レヂメントアリト云フ、土産、第一毛絨、穀物、上好錫、馬、羊、苧麻、大麻、及ビ数種ノ器什アリ、但塩泉ニ乏シ、闔州皆海水ヲ煮テ塩ヲ取ル、其地ノ北辺ニ数島アリ、皆英吉利ニ服属ス、「ヒツトランド」ト云フ者、最モ大ナリトス、其南辺、仏蘭西国ニ対スル処ノ海峡ヲ、「カライス」ト名ツク、幅員纔二十三里、便風一夜ニ往還スベシ、部内又一奇洞アリ、邃サ数歩ニ過キズ、其中常ニ湿温点滴ヲナス、人試ミニ百物ヲ投スレバ、皆化シテ石質ノ物トナリ、漸クニシテ堅石トナル、此国本ト羊ヲ産セズ、百年前、国王其侍臣ニ命ジ、伊斯把泥亜ヨリ、羊抵数十頭ヲ移シ、当時嚴ニ、之ヲ殺傷スルヲ禁ズ、而後國中夥シク羊ヲ産ス、其形状皮毛ノ美、伊斯把泥亜産ニ比スルニ、更ニ一等ヲ加フト云、

(I) イギリスが、宝永五年(一七〇八)にスコットランドを併合し、享和二年(一八〇二)の頃、アイルランドを併合したことを「坤輿図識 補」によって記している。実際にスコットランドを併合したのは一七〇七年、アイルランドを併合したのは一八〇一年である。

(J) 松陰は、六一レジメントの人数を計算して、五万二七〇四名という人数を行間に加筆している。軍事力の規模に関心を寄せていることがわかる。

なお、「坤輿図識 補」巻三の「大貌利太泥亜」^{ブリタニヤ}には、イギリスの産業について、「邦人(イギリス人)ノ産業ヲナス者ハ、大約工場二出テ、諸種器什ヲ製造シ、其品件ヲ四方ニ貿易シテ、夥ク利益ヲ得ルト云、就中、木綿ハ、本土ノ名産ニシテ、此品ヲ製造スル者八十万余」と記している。さらに、^{ロンドン}の労働者について、「其他工場ニ役スル者、雇銭低下ニシテ、好酒ヲ鯨飲スルコト能ハサルトキハ、此煙ヲ吸テ、其快ヲ取ル」と、記している。この「工場」という用語は、工場のことである。「坤輿図識」・「坤輿図識 補」には、「工場」という用語が散見される。松陰は、安政五年の「学校を議す」の中で、学校に「作場」(工場のこと)を付設すべきとする論を展開している。「作場」は、本来は農作物を作る所の意味であるから、工場の意味で用いるのは松陰独自の表現である。その用語の発想の源は、「坤輿図識」・「坤輿図識 補」の「工場」という用語が関係していることが推定される。

(三) フランスの翻刻(「坤輿図識」巻二、萩松陰神社蔵)
 (、) ^{フランス} 仏蘭西、八十六州二分ツ、其首府ヲ、(、) ^{パレニス} 把理斯ト云、^{セルネ} 舍擲河畔ニ在リ、城門十八、

(K) (把理斯一名チュエルレイイン府トアリ、寛按、此名称ハ国王ノ居城郭内ヲ云(補)、国王ノ居城造築宏大、欧羅巴ニ冠タリ、郭内五十七、牆壁ノ高一丈三尺ヨリ、一丈五尺余ニ至ル、(同))

街衢七百十三アリ、府内人煙櫛比、百貨具ハラザルモノナシ、戸数三万(二万九千四百(補)、人口六十万(七十一万四千九百六十六(同))、諺ニ曰、仏蘭西ノ人民ハ、伊斯把泥亜ノ馬ノ如シト、蓋シ其数過多ナルヲ称賛スルナリ、其人伶俐ニシテ、能ク百事ニ勉強ス、故ニ又独逸人ノ諺ニ曰、仏人ハ友朋ト為スベシ、隣国ト為スベカラズト、是其奪掠ヲ畏レテナリ、府内大官廳アリ、製造奇巧、百年ニシテ成ル、其楼上、国王騎馬ノ像アリ、黄金ヲ以テ鑄造ス、重サ四十貫アリト云、土人常ニ英吉利人ト、互ニ自国ノ繁華ヲ誇揚ス、其論今ニ至リテ絶ヘズ、英人難シテ曰、把理斯府^{ロンドン}ハ、龍動府ヨリ小、一ナリ、戸数亦少シ、一ナリ、灌身居寡シ、三ナリ、瑩域ノ数少シ、四ナリ、夜中人ヲ饗応スルコト少シ、五ナリ、仏人モ亦之ヲ解シテ曰、龍動ハ、境地長シトイヘドモ、把理斯ノ円大ニ如カズ、龍動ハ、戸数多シトイヘドモ、三層楼ニ過キズ、把理斯ハ、皆六七層ニ下ラズ、龍動ノ婦女ハ、情慾多キガ故ニ、子ヲ産スルコト多シ、龍動ハ、氣候不和ナルガ故ニ死スル

者多シ、英人ハ常ニ罪障多キガ故ニ、人ヲ夜饗シテ之ヲ懺悔ス
ト、其英吉利国土対スル地ニ、一鉅城アリ、「カライス城ト名ツ
ク、要害極メテ堅固、往時、英人ニ陥ラル、当時邦人切齒シテ曰、
若シ「カライス城ヲ恢復スルコトヲ得バ、三月絶飲、囚獄ニ繫ル
モ亦辞セズ、後十七年ニシテ、復スルコトヲ得タリ、英国女王、
深ク之ヲ憤恨シ、其死ニ瀕スルトキ、左右ニ告テ曰、孤若シ死セ
バ、試ミニ解剖スベシ、心頭必ズ「カライス」ノ文字アラン、其
二国、昔時ヨリシテ、抗拒相容レザルコト、概ネ此類ナリ、其国
王、所持スル所ノ軍艦、大小二百八、軍卒二十五万（勃那拔爾的
ノ盛時ハ、騎歩九十五万ト記載セリ、）徽号ハ、皆百合花ノ章ヲ
用ユ、此国昔時ヨリ、超然タル王国ニシテ、其兵威ノ隆盛ナルコ
ト、近隣之ニ比スル者ナシ、其位ハ必ズ、血統男子ニ譲ルヲ以テ
規トナセシニ、五十年前ヨリ、国中争乱続キ起リ、国王之ヲ征服
スルコト能ハズ、遂ニ闔州皆共和政治州トナリ、而シテ那波礼翁
勃那拔爾的^{ボナバルテ}以テ其長タラシム、是ニ於テ、勃那拔爾的^{ボナバルテ}氏、反逆ノ
志ヲ発シ、自ら第一世帝ト称シ、大ニ歐邏巴諸州ヲ、併吞セント
ス、然レドモ遂ニ志ヲ逞シフセズシテ亡ブ、近三十年前、西洋諸
州、大ニ会盟アリ、爾後旧ノ国王位ニ復スルコトヲ得タリ、闔州
広袤、里方一万四千二百箇、民口、二千九百万余、（勃那拔爾的
ノ盛時ハ、闔州ヲ百三十州二分ツ、人口、四千二百万ト記載セ
リ、）部中一異草アリ、海中ニ生ズ、春時水面二花ヲ開キ、雄花
ノ精液ヲ受ケ、妊シテ後凋ミテ、又水中ニ潜ミ、実ヲ結ブ、土人

之ヲ「フハリスネリヤ」ト名ツク、又曠原中ニ、潮湖アリ、結芒
シタル白塩ヲ生ズ、恰モ百爾西亜^{ベルシア}ノ山阜、又ハ亜弗利加ノ大沙漠
中ニ、凝塩ヲ産スルカ如シ、産物、上好葡萄酒、金、銀、五穀、
苧麻、阿利襪、其他百物、産セザルハナシ、又一歳中、兩度穀ヲ
収ムル処アリ、

(K) 松陰は、フランス国王の居城について、単に宏大大きだけ
はなく、郭の数、城壁の高さまで、軍事史的関心を寄せており、
兵学者としての視点から地誌を読んでいることがわかる。

なお、ナポレオンのヨーロッパ征服については、封建国家から
の自由解放とする評価ではなく、「併呑^{へいどん}」のイメージで記してい
る「坤輿図識」を学んでいることがわかる。

三 吉田松陰の海外認識と政治思想への影響

ここでは、松陰の海外認識が、その政治思想にどのような影響
を与えているかについて、松陰書簡の中では最もよく知られて
いる、安政六年四月七日付の北山安世宛書簡を用いて具体的に
検討しよう。まず、注目すべき箇所^{箇所}に記号を付しつつ書簡を引用
し、次にその記述内容について分析しよう。

「安政六年四月七日付、北山安世宛吉田松陰書簡」(八一―二九二
頁―二九三頁)

(前略) 幕府遂に人なし、瑣屑の事は可なりに辨じも致すべ

けれども、宇宙を達観して大略を展ぶるの人なし。外夷控馭最も其の宜しきを失ひ、著々人に制せられること計り、(A) 癸丑・甲寅より已に六七年に及べども、今に航海の事なし。華盛頓がどこにあるやら、龍動が如何なる處やら、画そらごとにて何の控馭を能くなさんや。(中略)

徳川存する内は遂に墨・魯・暗・拂に制せらるること、どれ程に立ち行くべくも計り難し、實に長大息なり。幸に上に明天子あり。深く爰に叡慮を惱まされたれども、搢紳衣魚の陋習は幕府より更に甚しく、但だ外夷を近づけては神国の汚れと申す事計りにて、上古の雄図遠略等は少しも思召し出されず、事の成らぬも固より其の所なり。(中略)

(B) 獨立不羈三千年來の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。(C) 那波列翁を起してフレーヘッドを唱へねば腹悶醫し難し。僕固より其の成すべからざるは知れども、昨年以來微力相應に粉骨碎身すれど一も裨益なし。徒らに岸獄に坐するを得るのみ。此の餘の處置、妄言すれば則ち族せられんれども、今の幕府も諸侯も最早醉人なれば、扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼みなし。されど本藩の恩と、天朝の徳とは何如にしても忘るるに方なし。草莽崛起の力を以て近くは本藩を維持し、遠くは天朝の中興を輔佐し奉れば、匹夫の諒に負くが如くなれど、神州に大功ある人と云ふべし。此の人要するに管仲已

下には立たざるなり。

外夷の事情何如。余が所見にては(D) 墨夷の處置大いに次序ある様見ゆ。且つ立国の方も宜しく、国又甚だ古からず、最も強敵なるべしと思ふ。(E) 藩人崎遊せし者多く暗夷の無力を誇張す。(F) 魯夷は大国の風と云ふべきかなれども、稍や迂濶を覚ゆ。高見何如。(G) 墨夷も登城せし、「ハルリス」は僕深く畏れず、虚言甚だ多し。征夷府中に是れをさへ辨折の人なきは嘆ずべし。然れども「ハルリス」の言逐一行はるる時は神州實に危し。「ハルリス」の言虚喝ならば幸なり、何如。(H) 墨夷東洋に一地もなければ、爪哇や日本を懇望するは實に彼れに在りて已むを得ざるのことならん。右愚按逐一述べがたし。大要今の儘にては神州陸沈疑なし。(I) 恢復の策は劉項・那波列翁等に非ざれば出来がたし。而して今未だ爰に著眼の人を見ず。(後略)

(A) 松陰は豊富な海外知識をもとに、幕吏の海外認識不足を厳しく批判している。

(B) 「獨立不羈」は、松陰がその主張の核心である「国家の主体的獨立」を表現するために用いた重要語句であるが、「坤輿圖識」にも多出しており、その影響を受けたと推察される。

(C) ナポレオンについては、フレーヘッドを唱えるという文脈の中で使われているので、松陰は自由主義を主張していると

解釈されることが多いが、(I)のように、劉邦・項羽と同列の比喩で用いられている。よって、ナポレオンは、非常の回復をすることが出来る強力な軍事力を持つ者とイメージされていたとみられる。これは、「坤輿図識」で、ナポレオンはヨーロッパを「併呑」したと記述されていることと整合する。

(D) アメリカが新興国であり、急速に発展していることは、「坤輿図識」で詳述されている。

(E) イギリスは、面積が小さく、人口が少ないため、外面だけ見ると、無力であると考えられていた。しかし松陰は、「坤輿図識補」のイギリスの国勢の数値から、強大さを正確に理解しており、その認識をもとにした記述と考えられる。「坤輿図識補」に記された全世界にまたがるイギリス全体の国勢の主要部分を表化するのを表1のようにする。イギリスは、世界各地に属国を有しており、それらを統合するとまさに世界第一の強国であったのである。

(F) ロシアは、面積が広大で人口も当時としては多いほうで、大國と思われていた。しかし、松陰はその内実を正確に見抜いていた。ロシアの国勢の主要数値を「坤輿図識補」から示すと、表2のようになる。このように、ロシアは実質的な軍事力はイギリスほどではなく、「やや迂闊」と松陰は評価しているのである。(G) ハリスの虚言については、安政四年(一八五七)十月二十六日のハリスの通商条約要求の根拠に対し、逐一詳細に論駁

表1 イギリスの国勢 19世紀前半

イギリスの所轄地域	人口(人)
イギリス本国	17,127,544
ヨーロッパ	180,300
アジア	42,667,413
アフリカ	218,477
北アメリカ	486,146
西インド	749,171
南アメリカ	260,000
オーストラリア	12,000
合計	61,701,051
イギリス軍総計人数	671,241

(注)「坤輿図識補」により作成。原本の数値は散在しているが、最も適切と判断される数値を組み合わせて作成した。

表2 ロシアの国勢 19世紀前半

ロシアの所轄地域	人口(人)
ロシア	34,000,000
シベリア	12,000,000
合計	46,000,000
ロシア軍総計人数	泰平時 639,415 ただし内200,000は空名

(注)「坤輿図識補」により作成。

する対策書を作成している(「墨使申立の趣論駁条件」「戊午幽室文稿」四一四三九〜四五五)。そこでは、アメリカが土地を手に入れるのに武力を用いた事実、清国でアヘンの交易をしていた事実、インドが植民地化されてしまったのは、国内の不協和が要因である事実などをあげて、ハリスの主張は虚偽であると論破している。

(H) アメリカが、アジアにまだ植民地を有していないことは、松陰は正確に把握している。

これまで検討したことにより、松陰は幅広く正確な海外認識に基づいて、幕府・朝廷・当時の知識人の対外政策を批判し、その政治思想を展開していることが判明する。

むすび

以上、吉田松陰と「坤輿図識」のかかわりを検討することによって、松陰の海外認識を解明した。その結果、松陰は幅広く正確な海外認識を有しており、その基盤の上に立って、対外政策を提起していることが判明した。この課題は、さらに松陰が自分で筆写し生涯校訂を続けた「海国図志」とのかかわりを解明して、海外認識の事例を豊富にしていく必要がある。

注

(1) 『吉田松陰全集』は、これまで次の三種類が発行され、それぞれの版の復刻版がある。

① 『吉田松陰全集』山口県教育会編、岩波書店発行、昭和九年から昭和十一年（一九三四～一九三六）。定本版と呼ばれる。全一〇巻。原史料に最も忠実。

② 『吉田松陰全集』山口県教育会編、岩波書店発行、昭和十三年から一五年（一九三八～一九四〇）。普及版と呼ばれる。全一二巻。定本版をもとに、平易に通読できるようにした。

③ 『吉田松陰全集』山口県教育会編、大和書房発行、昭和四十七年から四十九年（一九七二～一九七四）。大衆版と呼ばれる。全一〇巻と別巻からなる。普及版をもとに、さらに読み仮名や註解を増やしている。

以上のように、三種類の『全集』が発行されているが、収録史料

は、定本版を踏襲したままである。定本版には、松陰が熟読した「坤輿図識」、筆写した「海国図志」など、海外認識の跡を分析できる史料は収録・解説されていない。一方で、中国古典に関する松陰の書き込みは収録されている。この原因は、発刊の辞に「容易ならざる時局」に対応するために刊行すると表明されているように、昭和初期から中期という編纂当時の時局が影響していると推定される。

(2) 松陰は生涯にわたって山田宇右衛門を尊敬し続けた。安政三年の「治心齋先生に與ふる書」には、「僕少にして門下に親炙し、片言隻辞、未だ嘗て正を先生に取らざるはあらず、先生も亦傾倒して遺すなし」（丙辰幽室文稿）『吉田松陰全集』二（大和書房、一九七二年）四一三頁）と、少年期から現在に至るまで、山田の考えを正として受け入れたと回想している。以下、『吉田松陰全集』からの引用は、特に断らない限り大和書房版によるので、二一四一三のように略記する。

(3) 「講孟余話」三一四一〇。

(4) 「坤輿図識」の書誌的研究としては、辻田右左男「箕作省吾『坤輿図識』―著者をめぐる一、二の問題―」（奈良大学紀要）二、一九七三年）がある。

(5) 定本『吉田松陰全集』九（岩波書店、一九三五年）六八頁。

(6) 「坤輿図識」の翻刻としては、半谷二郎「箕作省吾」（旺史社、一九九一年）があるが、「坤輿図識」凡例に明記されている、「附属国を一字下げにする」という最も重要なレイアウトが守られていな

いたため、箕作省吾の著述意図が伝わらない翻刻となってしまうている。

(7) 「坤輿図識」凡例、萩松陰神社蔵。

(8) ジョージ・ワシントンの生涯は、松陰および門人達に大きな影響を与えている。「話聖東小伝」は、拙稿「幕末の志士達のアメリカ独立戦争認識」(『山口県地方史研究』一〇二、二〇〇九年)において翻刻した。「坤輿図識補」(早稲田大学図書館蔵。「補」は萩松陰神社には伝存しない)巻二には「話聖東小伝」が特記されており、ワシントンの極めて公正な人物であったことの経歴を詳細に記述し、最後に、「話聖東、容貌尊嚴、其才以テ、政官タルニ足レリ、其勇以テ不羈ノ「ビュルゲル」タルニ足レリ、其事ニ処スル凝重、百難競起リ、勢極テ重大ナルニ、至ルトイヘドモ、未タ嘗テ挫折セズ、其国ニ忠ナルコト、百折スレドモ銷磨セズ、政ニ臨ムニ、国体ヲ失ハザルヲ以テ主トシ、邦ヲ尊フシ、人民ヲ繁衍シ、恩ヲ施スコト、一日モ之ヲ遺レズ、其見解毎ニ根柢アリ、又私見ヲ主張セズ、事ニ処シテ嚴正ナレドモ、仁アリ、此レ話聖東ノ天性然リトス、誠ニ敬恭愛憐スベクシテ、大業ヲ為シ、偉功ヲ建ツベキ奇男子ナリ」と、ワシントンの政官としての才能、その勇氣が独立不羈たる豪族に足るものであるとし、百難が起ころうとも挫折せず、国に忠なることは百折すれども銷磨せず、私見を主張せず、嚴正であつて仁あり、大業を成し、偉功を建つべき素晴らしい男子と絶賛している。

(9) 安政六年四月七日付、北山安世宛吉田松陰書翰、八一―二九二。

(付記)

六七(四)頁上段二行目から下段二行目までの(B)吉田松陰の書き込み、および六五(六)頁下段八行目から一七行目までの(B)解説は、英国の清教徒(ピューリタン)が、一六二〇年、アメリカ大陸に移住したことについて記したものである。これは、英国国教会(プロテスタント)の一つの教派である分離派(ピューリタン、英国国教会の宗教改革を不徹底として、さらに徹底的な改革を求めたプロテスタント)の人達の中から、英国での弾圧を逃れようとして、メイフラワー号に乗り、アメリカに移住する者が発生した事件である。ピューリタンは、英国国教会から弾圧されたが、同じプロテスタントの系統である。

松陰が、(B)の書き込みで、新国に居住を希望した人は「加特力(カトリック)教を奉じ」と書いているのは、正確ではないが、典拠とした『海国図志 墨利加洲部』が、新国にわたつた二三百人が、「加特力教を奉じ」と書いているのを、そのまま踏襲してしまつた間違いと考えられる。

坤輿圖識 卷四下

共和政治

共和政治州總説

此疆域北ハ新貌利太泥亞ニ接シ南ハ墨是可ニ至リ
 其東西ハ大洋ニ臨ム域中本トハ八國ナリシニ次デ
 十三州トナル近世又倍々加リテ三十餘州ニ至ル然
 レ凡國主酋長有ルニ非ズ每國其賢者數人ヲ推テ政
 官トナス土人數種ニメ各地其俗ヲ同セズト雖凡亦
 彼此貴賤ノ別ヲ設クルトナシ其地ノ南部ハ稼穡ヲ
 業トシ北部ハ諸種ノ器什ヲ造リ亦或ハ四方ニ貿易
 スル者アリ其至ル地ハ歐邏巴諸州東西印度諸島及
 ビ支那國其最タリト云闔州人口一千四百二十四萬

「坤輿図識」卷四下、共和政治州總説（松陰神社蔵）

康熙二十八年初有十方丁
 乾隆五十九年不過三百九十三方二千三百二十五
 道光二十年一千二百八十六方九百二十丁
按三十七年三同增八百九十四方五千五百九十五

此數我天保六年軍人八十萬戰艦大小八十一其制
 西洋人記載スル所軍人八十萬戰艦大小八十一其制
 度刑政及ビ國ノ大事ハ各國共和シテ其時空ニ從ス
 其風俗各地同ジカラズト雖凡要スルニ粗西洋諸州
 ニ髣髴タリ惟天度ハ歐邏巴諸州ニ同ジト雖凡其土
 地山川ノ形勢ニ因リテ氣候之ニ比ズト較寒冽ナ
 リ此域本ト亞墨利加洲中ノ一部ト雖凡其地洪大共
 シテ人民過多其勢モ亦最モ旺盛ナルヲ以テ今或ハ
 單ニ此地ヲ通稱ノ北亞墨利加洲ト云按ズルニ此域
 其初ノハ茫々タル曠野ノミニシテ是名稱有ニ非ズ
 我萬治六年ノ比ニ當テ英咭喇國人始メニ此地ノ南

中興國代
 卷之六
 四
 至誠館大學

泰昌年間英吉利王嚴諭度臣奉
上帝者一同歸波羅士特教不得
任意奉類利教加特力教違者加
刑由是國人願從居新國者三百
人蓋奉加特力教欲隨意奉上帝
也國志泰昌元年秋元和六年也

邊カロリナ國ニ人種ヲ移ス尋テ又享保十九年此部
中ヲウヨルク及ビゴン子クチキツトノ地ニ數百人
人種ヲ移スト云ス然レモ當時ハ尚寂寞タル寒郷ニ
ノ一モ記載スヘキ者ナシ後數年嘆咭喇國ノ人民間
々其固有定法ノ教化ニ從ハサル者有リ是ニ於テ其
種ノ人民數萬ヲ捕ヘテ遠ク此地ニ遷ス其人民等當
時飲食衣服ノ用ニ缺クト雖モ又竊ニ此地ニ國主首
長ナキヲ喜ビ其衆人ト謀リ大ニ山川ヲ疏鑿シ土地
ヲ開墾シテ農耘稼穡ヲ業トシ又旁ラ漁獵ヲ事トス
後若干年ニ人其子孫蕃衍シ三十有餘萬ニ及ビ物産

坤輿圖識 卷四下

夢雷樓藏

壬午盛頓為仰於乾隆四十年四月
 初四日檢告各國曰云、因志
 共和于州、總府ヲ訪知、
 名トス、補
 路重、東小、獨、月、寬、板、十、年、板、十
 二月十四日、卒、於、六、十七、嘉慶、五年

又極メテ夥シ、遂ニハ、乾隆間、嘆人、此地ニ來リテ、交易ヲ為ス
 ニ至ル、我寶曆中、乾隆間、英國ニ數年ノ戰爭有リテ、其人民
 大ニ凋喪シ、四方ノ貿易、缺ク處少ナカラス、是ニ於テ
 嘆人、此地ノ人民ヲ雇テ、自己ノ用ニ充ントス、邦人其
 言ノ猖狂ナルト、俸錢ノ薄キトヲ惡ミテ、其命令ニ服
 從セズ、却テ嘆人ノ印度諸邦ヨリ、輸送スル所ノ茶葉、
 三百四十二箱ヲ取テ水中ニ投ス、是ニ於テ、嘆人憤懣
 ニ堪ヘズ、兵艦數艘ヲ發メ、此地ノ第一馬頭ヲ圍ミ、先
 ヅ其糧道ヲ絶ツ、土人亦頗ル窮シ、其共和十三州ノ政
 官ヲ會メ、事ノ成敗ヲ議ス、忽チ軍官名ハ「ワスヒンク

七百七十年年
 永永西
 頃北思思
 利加ノ國其伊和利頃
 云戰爭及ア七百七十年年
 頃天時元子三連綿
 人ヲ逐付ニ於ニ自之ノ土地トナリ
 考固問者
 乾隆五十三年推萃盛頭為首
 華因頓在位次始末八年傳阿丹
 士嘉慶六年同阿丹士在位四年
 傳遊費遜
 底遜
 在位八年傳阿丹子
 在位四年傳查其遜道光十七年
 在位八年傳法標倫

坤輿圖識 卷四
 夢霞樓藏

トシ、文官名ハ、フランクリン席ヲ進テ、賜言メ曰、天時
 ハ失フ可カラズ、空ク長ク喚人ト交ヲ絶ツベシ、衆其
 議ニ一決ス、喚人モ亦事ノ成ル可カラザルト、己レカ
 言ノ理ナラザルトヲ知テ、其圍ミヲ解キ去ル、尋イデ
 我安永九年、此地ノ政官、某ナルモノ、喚咭喇國入ト會
 メ長ク不羈獨立ノ國タルヲ約ス、爾來國勢倍々加
 ハリ、其近隣、徒黨ヲ聚會メ、此盟社ニ來會スル者、勝テ
 算フベカラズ、近二十年ニ至リテハ、各國學校ヲ設ケ、
 日々ニ經濟ノ學ヲ講ズ、就中子ウヨロク、又サクセ
 ツツ國ノ如キハ、巧麗ノ觀象臺、羅甸學、及ビ數萬種ノ

嘉慶十九年增累斯世部
拾遺我文化十二年

本草園ヲ設ケテ、生徒ニ教諭スト云フ、其南部ハ、氣候不和ニメ、土人往々、黃熱病ニ係リテ、死スル者アリト云フ、部中「ケン」左ケ國ニ、一奇事アリ、嘗テ硝石坑ヲ掘リシニ、中ニ石人數員ノ存在スルヲ見ルト云、寬愚按外紀所謂那多里石人ノ類カ土産、五穀、苧麻、烟草、茜根、吐根、砂糖、藍、綿、吉貝、藥物、蜜、蠟、鐵、鉛、銅、些小金銀、上好牛馬、皮革、海狸、鼈、諸種上好器什等、

司 累斯好 國志 ア ハ、本ト伊斯把泥亞ニ屬ス、後佛蘭西ニ併セラル、我文化元年、佛人千五百萬金、ハ為メ、此地ヲ割テ、長ク共和政治州ニ嚮キ與フ、其疆界、北ハ

申恩圖載

卷四下

六

嘉慶十九年增累斯世部

未審ノ曠野ニ至リ、南西ハ兩墨是可ニ接ス、部中大
 河アリ、美新細突河ツシスシツト云、夥シク鱗介ノ族ヲ産
 ス、其首府ヲ「ケルレア」ン区ト云、人口三萬九千二
 百餘、我文化中、此州ヲ分テ、三大部トナス、每部人
 口三萬二千餘、中ニ十二酋長アリテ其訴訟ヲ聽ク、
 土地ハ膏腴ニメ、上好ノ五穀ヲ産スル、北亞墨利
 加地方之ニ比較スベキ者ナシ、産物、金、銀、酒、材木、鼈
 其種類數品アリ、皆啖フベシ
 花地フロリダ、往古ハ東西二部ニ分ツ、其首府ヲ「アウギスチ
 ン」ト云、人口二千餘、昔時ハ此地ノ人盜賊有ル、トヲ

知ラズ、故ニ他邦ノ人此地ニ來リ住スル者、他ノ物
貨ヲ竊ミ、公然トノ慚心ナカリシト云ス、今ハ漸ク
西洋人種蕃衍メ、其風俗アルヲナシ、其東部ハ、山岳
曠原、或ハ大沙漠ノミニメ、五穀ヲ産スルヲ至テ寡
シ、西部ハ之ト同ジカラズ、百年前、嘆咭喇人此地ノ
西部ヲ奪掠メ、其地ヲ併有ス、後三十年ニメ、伊斯把
泥亞ニ復スト云フ、我文政三年ノ會盟ヨリ、此地
ノバルチト川迄西ヲ割テ、長ク共和政治州ニ附屬
タラシムルヲ約ス、産物、米穀、酒、吉貝、木綿、美麗蛇、
其共和政治州ト稱スル者三十一國、

北緯正序三身

南北駕羅連 同志

北緯正序 卷四下

夢霞樓藏

一 「マ」スミチツ 二 「イ」子三「カ」ルモン止 四 「ニ」イ
ウハムプシール 五 「シ」ン子クチ名ツ止 六 「ロ」デス
エイランド 七 「イ」ウエルセ 八 「イ」ウヨルク
九 「ベ」ンセールネ 十 「ゲ」ンエツケ 十一 「イ」
引底正 同志 十二 「マ」レイランド 十三 「ヒ」ルギニ 十四 「イ」
南 十五 「テ」ン子スセーランド 十六 「ア」
北 ルドカロリ 十七 「イ」ドカロリ 十八 「ゲ」ラル
美士細比 同志 ギイ 十九 「テ」ラワアレ 二十 「シ」スシツピ 二
前 十一 「ラ」ルレア 二十二 「イル」リノイス 二十三
前 十四 「シ」ア 二十四 「ミ」シガウ 二十五 「ア」トルド

ストゲビイ^ド 二十六^リ五^ンビ^ア 二十七^ラロ^リ
 タ 二十八^{アル}ラバ^ロ 二十九^{アル}カンサ^ロ 三
 十^子ガ^ン 三十一^ミス^ソウ^リ
 新思^ス可^コ齊^シ亞^ヤ 啖^ダ咭^ダ喇^ラニ^ニ隸^ス、其^其疆^疆界^界北^北ハ^ハア^アレ^レト^トニ^ニ島
 ニ^ニ界^界シ^シ、西^西ハ^ハ新^新ア^アロ^ロン^ン区^区ニ^ニ至^至リ^リテ^テ大^大地^地ニ^ニ接^接續^續ス、今
 分^分テ^テ七^七國^國ト^トス、其^其府^府ヲ^ヲハ^ハル^ルリ^リハ^ハキ^キ区^区ト^ト云^云、入^入口^口八^八千
 零^零五^五十^十、其^其海^海岸^岸大^大港^港ア^アリ、常^常ニ^ニ軍^軍艦^艦ヲ^ヲ維^維テ^テ、非^非常^常ニ^ニ備
 フ、此^此地^地海^海潮^潮ハ^ハ干^干滿^滿、最^最モ^モ大^大ニ^ニ、其^其甚^甚シ^シキ^キハ^ハ高^高サ^サ四
 十^十尺^尺ニ^ニ躋^躋ル^ルト^ト云^云、其^其内^内部^部ハ^ハ、土^土地^地頗^頗ル^ル高^高隆^隆ニ^ニ、多^多ク
 ノ^ノ諸^諸穀^穀物^物ヲ^ヲ産^産ス、大^大氣^氣ハ^ハ總^總テ^テ寒^寒冷^冷ニ^ニ、朝^朝夕^夕ハ^ハ海^海ニ

